

次の文章を読み、設問に答えなさい。

おれには秘密がある。牛が秘密を持つなんて変かもしれないけれど、だれにも言えないことがひとつだけある。おれは、木に登れる牛なのだ。

①木登りを覚えたあの日のことは、いまでも忘れない。一年くらい前のことだった。②おれは牧場から脱走した。牧場生活に何か不満があったわけではない。牧草はおいしかったし、一緒にaカわれていた仲間の牛たちもいいやつばかりだった。

時々、仲間の一頭が突然いなくなつてそれきり姿が見えなくなることもあったけど、その理由について深くは考えなかったし、雌牛の乳を毎朝だれかがしぼりに来ることだつて、まあそういうもんかな、くらいにしか考えなかった。とにかく、さしあたつてこれという不満はなかったけれど、おれはある日突然、牧場から脱走したのだった。

おれはその日、一日じゅうさくをながめていた。牧場にさくがあることについて我慢ができないほど気に入らなかつたわけではないけれどおれは急に、さくに囲まれて過ごすなんて、なんだか理屈に合わないんじゃないかな、と思つたんだ。好きな場所を自由に歩いてみたい。さくの向こうへ行つてみたい。そう思い立つと、すぐに実行したくなつた。

おれは自分が牛なぶん、思い立つとその衝動をおさえられない。助走をつけて走り出した。急に走りはじめたおれに仲間たちはおどろいて声をかけた。

「おい、何する気だ」

「そっちはさくだ」

その声をおれはbムシした。自分が何をする気かわかつていた。この先にさくがあることくらい知っている。それを飛びこえるつもりだった。

「あばよ」

20 全速力で走つた。飛びこえるつもりだったがさくが急速に近づいてきたとき、自分にジャンプ力がないことを思いだした。だがもうさくは眼前にせまつていて急に止まるなんてできない。そのまま走りつづけた。大きな衝撃があつて、おれは白くぬられた牧場のさくを全身でつき破つていた。

「牛がにげたぞ」

25 背後から声が聞こえた。③牛がにげた？ 人聞きの悪い、おれはさくをつき破つただけじゃないか。そう思ったとき犬のほえる声が近づいてきて、自分がにげなければならぬことに気がついた。

夢中で草原を走つた。犬なんかこわくないけど、あいつらはかみつくから苦手だ。それに犬たちの背後から追いかけてくる、銃を持つているはずの人間たちもきらいだ。おれは森のなかへ走りこんだ。いつも牧場から遠くに見えていた深い森だ。

30 森のなかには木の枝や下草が邪魔をして走りにくかつた。森がこんなふうになつていなんて、想像もつかなかった。犬の声はすぐ近くまでせまつている。どうすればいいのかわからなかつた。そのとき前方に大きな木が見えた。その大木に向かつておれは疾走した。何をする気なのか、自分でもよくわからなかつた。大木をなぎたおそうとしたのか、あるいは激突死しようとしたのか。

だがみような確信があつた。大丈夫だ、という確信。それだけを信じて、おれは大木目がけて突進した。どこをどんなふうにしたのか、あのときは夢中だったからよく覚えていない。気がつくとおれは木の上の、大きな枝の上に立つていた。はるか下方を数頭の犬がほえながら走り抜けていく。その後を牧場主たちが追いかけていった。

35 やがてあたりは静かになった。おれはそのまま、木の上でじっと息を殺していた。犬がいつまた引き返してくるかわからない。まさか牛が木の上ににげたとは思わないだろうから、ここにいる限りは安全なはずだ。長い時間、そこにじっとしていた。やがて犬と牧場主たちがあきらめたように引き返してきて、おれのはるか下を牧場のほうへ、とぼとぼと歩いていった。おれはやつと自由に息をすることができた。そしてはじめて木の上から遠い景色をながめた。森のむこうに、おれがさっきまで力わけていた牧場が小さく見える。さくのなかでは仲間だった牛たちが点のように小さく散らばつて、のんびりと牧草を食べている。

40 ずいぶん遠くまで来てしまつた、とおれは思った。だが後悔などしていない。鳥の音が聞こえる。頭上には青い空と、西に流れていく白い雲がある。一声、もおーと鳴いてみた。自由だ、とおれは思った。

45 あれから一年がたつ。この一年間、おれは森のなかをさまよい歩いた。おかげでおいしい草のある場所も何か所か覚えたし、木の実や野いちごのある場所も覚えた。谷へ行けば新鮮な清水が流れているし、熊や兎や鹿など、たくさんさんの友人もできた。④幸せだった。Aさくを破つたことでおれの一生はこんなにも大きく変化したのだった。

だがそのおれにもなやみがあつた。木に登れる。そのことをずっと森の友人たちには秘密にしてきた。牛が木に登つてもべつにはじることなんかないけれど、なんだか言い出せないうちに、ずるずると秘密になつてしまつたのだ。

「なあ牛」と、あるとき友人の鹿が言った。「お前、夜はいつもどこでねてるんだ」
 「それは……」木の上でねてるなんて言えなかった。「安全な場所があるんだ。秘密だけど」
 「ふうん」鹿は不審そうな顔でおれを見た。「牧場へ帰ってねるんじゃないのか。お前、脱走してきたなんてうそだろ」

「うそじゃない。森のおくに安全な洞窟があるんだ」
 「教えろよ、その洞窟」

55 「駄目だ」おれは言った。「秘密なんだ」

そうしてみんなには内緒で、おれは夜になるとだれにも見つからないように木に登り、ひっそりとねむっていた。ところが、つい昨日のことだ。夕方、そろそろねむくなってきたので木に登ろうとしていた。幸い、あたりにはだれもない。おれは助走をつけて、いつもの大きな木に向かって突進した。そして幹を一気にかけ登り、木の枝の上に立った。木に登るのはけっこうつかれる。あら息を静めようと呼吸を整えていたとき、下から声が聞こえた。

60 「見いちやった、見ちやった」

狸だ。狸は木の下からおれを見上げている。

「おい牛、お前は夜、そんなところでねむっていたのか。洞窟だなんて言うから、どこなのかと思って、そつと後をつけてきてみたんだ。そしたら木の上だなんて、信じらんない」

65 あははは、と狸は笑った。おれは⑤うんざりした気持で、狸が笑いやむのをじっと待った。狸は、いつまでも笑いつづけている。

「笑うなよ」おれは不機嫌な声で言った。

「だってえ、おつかしいんだもん。木の上でねる牛なんて、聞いたこともない」

「いいじゃないか、どこでねむったって。そんなに笑うことはないだろ。いいか、だれにも言うなよ」

「やだよおだ。みんなに教えるもん。やあい、木登り牛」

70 「木登り牛の、どことが悪い」

おれは木から降りていつて狸をなぐりつけようとしたが狸は、やあいやあい、と言いながら森のおくへ走り去った。それが昨日のことだ。もう夜が明けて、森の動物たちが活動しはじめる時刻になった。おれは木から降りることもできずに、さっきからため息ばかりついている。

75 あの狸のことだ、いまごろはおれのことを森じゅうに言いふらしているにちがいない。あいつは木登り牛なんだぜ、と。このこと降りていったりすればみんなに馬鹿にされる、どうすればいいんだろう。

そうしているうちに、木の下に動物が集まりはじめた。やはり狸が言いふらしたのだ。動物たちは木を取り囲むように集まって、上を見上げながら何かひそひそ声で話している。おれは木の葉に身をかくすようにして、さらに息を殺した。

「おい、牛」

80 下から声がした。おれはじっとしていた。ほつといてくれ、おれのことなんかかまわずに早く散れ。みんなどこかへ行ってしまえ。

「おい牛、そこにいるのはわかってるんだ」

「……………」

85 「たいしたもんだなあ。木に登れるなんてすばらしいじゃないか。そんなすごいことができるのに、どうしていままでみんなにかくしていたんだ」

「はづかしいのよ、きつと」

「cテ||ているのかなあ」

90 なんだか様子がおかしい。決してからかっているのではなく、みんなは本気になっておれを賞賛している。しまいには木の下で拍手したり万歳をしたりしはじめた。

「おい牛」

「何だよ」おれはやつと返事をした。「ほつといてくれよ」

「テれなくてもいいじゃないか。あんたみたいな牛、見たことがないってみんなで感心しているんだ。そういうことを自慢もしないでひっそり暮らすなんて、なかなかできないことだ」

「本気で言っているのか。狸は馬鹿にしてた」

95 「狸？ ああ、こいつは牛が木に登っていることを発見した功労者だ。馬鹿になんかしてないよな。そうだろ。な」

⑥うながされて狸は、ばつの悪そうな顔でこちらを見上げている。

「馬鹿になんかしてません」狸は消え入りそうな細い声で言った。「尊敬してます」

「ほうらみろ。みんな尊敬してる。そういうわけだから降りてきて賞状を受け取ってほしい」

「賞状？」

「森の功労者賞だ。⑦みんな、おれたちに勇氣と力と、未来への夢をあたえてくれた立派な牛をほめたたえようじゃないか。拍手」

いっせいに拍手がわき起こった。おれはしかたなく木から降りていって賞状を受け取った。副賞の『くるみ半年分』も受け取って、集まった一人ひとりと握手をかわした。そうしているうちにおれは、自分がなんだかとても立派なことを成しとげたような気分になってきた。

WNN—ウツディ・ニュース・ネットワークのニュースキャスターも来ていて、りすのアナウンサーがおれにマイクを向けた。

「木に登った動機は何でしたか」

「より高い場所を目指したんです」

おれはそう答えた。獵犬に追われて夢中で木にかけ上がったんだなんて、とても言えない。

110

「つぎの目標は何でしょうか」

「まだ考えていません。とりあえずいまはひとつのことを成しとげた満足感で胸がいっぱいですが、さらに高い場所を目指すつもりです」

ほんとかな、マイクに向かってしゃべりながらおれは思った。⑧いつの間におれは、平気でこんなうそをつくようになったんだ。希望の牛。森のほこり。動物たちの英雄。アナウンサーは勝手な言葉でおれをかざり立てている。

115

ああ、こんなことなら馬鹿にされたほうがまだよかったのかもしれない。このままではおれは生涯、森の英雄として立派に生きていかなければならない。そんなのいやだ。面倒だ。馬鹿にしてもかまわないからおれを自由にしてくれ。

120

だがおれはその午後、森の一日市長にdニンメイされ、『十二支鼻歌コンテスト』の審査委員までやらされた。みんなはおれのひづめスタンプをほしがり、行く先々でおれの足先にすみをぬって色紙におし当てた。Bだった一日で、おれの人生はすっかり変化してしまつた。夜のダンスパーティーが終わるころには、すっかりつかれ果てていた。

「もうねむいから帰ってもいいかな」

「おつかれようですね。わかりました、では会場のほうへご案内します」

「会場？ おれはいつもの場所でねむりたいんだ」

125

「ですから、現地に用意がしてありますので」

連れられていくと、そこにはいつもおれが登る木だけを一本残して周囲はきれいに整地され、観客席がつくられていた。超満員の観客はおれが木の下に立つと拍手をした。おれにライトが当てられ、テレビカメラが動き、生中継がはじまつた。

「さあ、みなさん。世紀の木登り牛、生中継の時間がやってきました。牛さん、いまのお気持ちを」

「……………」

130

⑨おれはうんざりして何も言えなかつた。一人にしてくれ。そう心のなかでつぶやき、助走をつけて木に登った。下方で大きな拍手が起きたが、つかれ果てていたおれはそのまま枝の上でぐっすり寝入ってしまった。

翌朝、目を覚ますともう木の下にはぎっしりと観衆が集まっていた。おれはうんざりして、遠い牧場のほうを見た。その牧場から、仲間を数頭乗せたトラックが町のほうへ走り出していくのが見えた。そういえば、あのトラックがどこへ行くのかおれはまだ知らない。

135

「⑩もつと高く！」

下から観衆の声が聞こえる。もつと木の上のほうまで登れと言っているのだ。その声は大きなうねりになって聞こえてくる。Cおれは森のむこうの、ずっと遠い場所を見ている。さっきのトラックの姿はもう見えない。あれに乗ってどこかへ行った仲間の牛たちは、二度と帰ってこない。そしておれは、木のでっぺんを指す以外に道はないのだ。

(薄井ゆうじ「木登り牛」より)

〈語注〉※1衝動……つきうごかされること

※2不審そう……疑っているような

※3賞賛……ほめたたえること

※4功労者……手がらを立てた人

※5十二支……えとのこと。今年は寅年

〔設問〕 解答はすべて、解答らんにおさまるように書きなさい。句読点なども一字分とします。

- 一 ― 線 a カ (4 行目)、 ― 線 b ム シ (17 行目)、 ― 線 c テ (87 行目)、 ― 線 d ニンメイ (118 行目) のカタカナを漢字で書きなさい。
- 二 ― 線①「木登りを覚えたあの日のことは、いまでも忘れない」(3 行目)とありますが、「あの日のこと」について書かれているのは何行目までですか。数字で答えなさい。
- 三 ― 線②「おれは牧場から脱走した」(3 行目)とありますが、なぜですか。ていねいに説明しなさい。
- 四 ― 線③「牛がにげた? 人間きの悪い、おれはさくをつき破っただけじゃないか」(24 行目)とありますが、「にげた」という言い方と「さくをつき破った」という言い方には、どのようなちがいがありますか。説明しなさい。
- 五 ― 線④「幸せだった」(46 行目)とありますが、どのようなことを牛は「幸せ」だと思ったのですか。自分の言葉で答えなさい。
- 六 ― 線⑤「うんざりした気持」(64 行目)とありますが、この時の牛の気持ちを説明しなさい。
- 七 ― 線⑥「うながされて狸は、ばつの悪そうな顔でこちらを見上げている」(96 行目)とありますが、なぜ狸は「ばつの悪そうな顔」で牛を見上げているのですか。説明しなさい。
- 八 ― 線⑦「みんな、おれたちに勇気と力と、未来への夢をあたえてくれた立派な牛をほめたたえようじゃないか」(100、101 行目)とありますが、牛が木に登ったことがなぜ「勇気と力と、未来への夢をあたえてくれた」ことになるのですか。説明しなさい。
- 九 ― 線⑧「いつの間におれは、平気でこんなうそをつくようになったんだ」(113、114 行目)とありますが、1「こんなうそ」とはどのようなうそですか。二つ答えなさい。
- 十 ― 線⑨「おれはうんざりして何も言えなかった」(130 行目)とありますが、この時の牛の気持ちを説明しなさい。
- 十一 ― 線⑩「もつと高く!」(135 行目)とありますが、牛はこの観衆の声をどのようなものとして受け止めていますか。説明しなさい。

- 十二 ― 線 A「さくを破ったことでおれの一生はこんなにも大きく変化したのだった」(46 行目)、 ― 線 B「たった一日で、おれの人生はすっかり変化してしまった」(119、120 行目)、 ― 線 C「おれは森のむこうの……道はないのだ」(137、138 行目)とありますが、
 - 1 ― 線 A について、「さくを破った」ことで「おれの一生」はどのように変化しましたか。説明しなさい。
 - 2 ― 線 B について、「たった一日」で「おれの人生」はどのように変化しましたか。説明しなさい。
 - 3 ― 線 C について、ここには牛のどのような思いがこめられていますか。本文全体をよく読んで答えなさい。

〈問題は「」で終わります〉